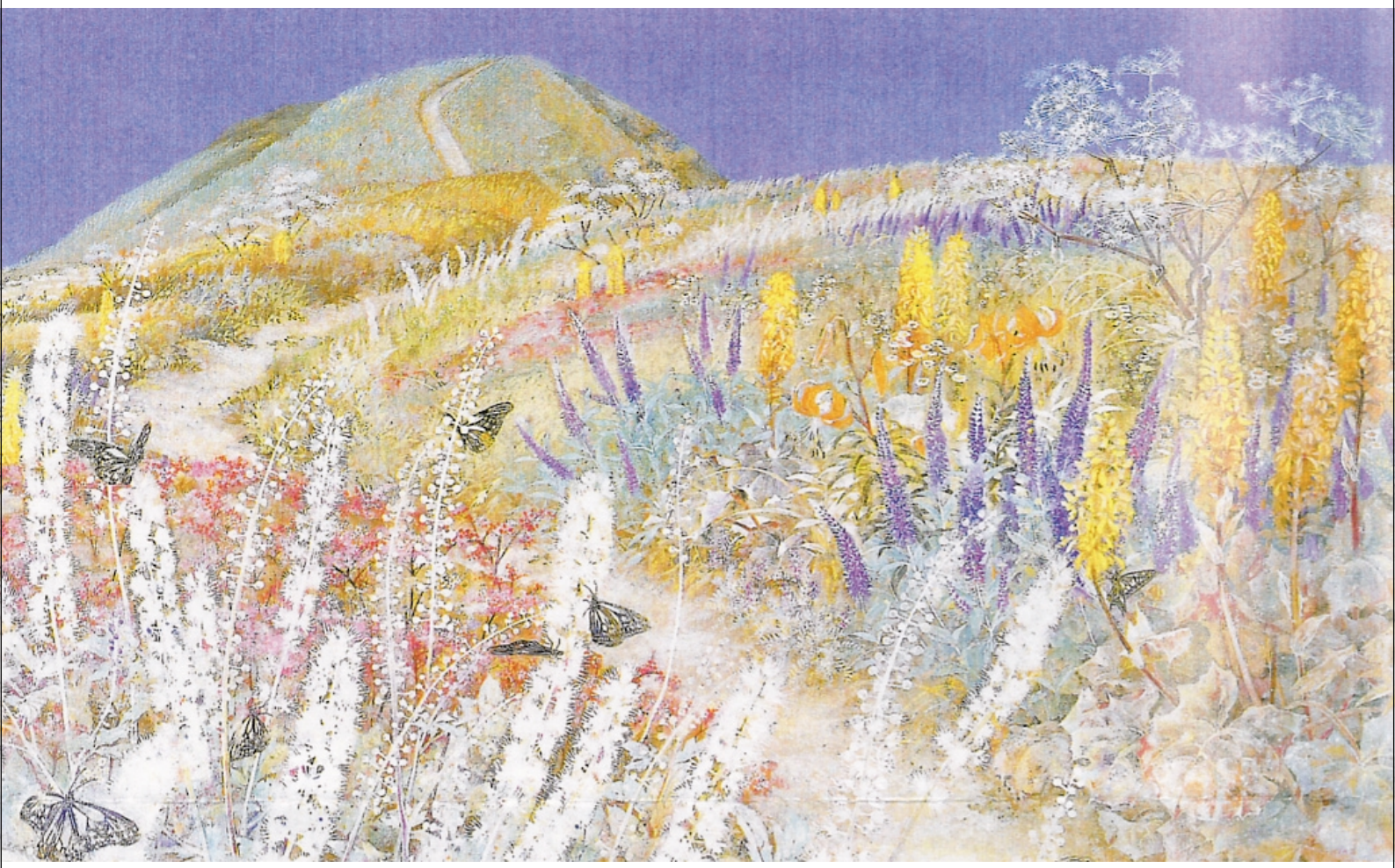
明日の淡海

自然と人との共生をめざして

Vol.11
2004.10.15　発行



写真／「空に近い径（みち）」北村恵美子作

Contents

巻頭言　「今、あらためて水害経験を次の世代に伝えたい」
京都精華大学教授・琵琶湖博物館研究顧問 嘉田由紀子　1

巻頭特集　はじまりは「抱きしめてBIWAKO」
～「抱きしめてBIWAKO」発起人たちの座談会～　2

私の印象に残った仕事　滋賀発!!「グリーン購入」
「グリーン購入」インタビュー　北川憲司　6

市町村エコの輪　子どもたちが楽しみながら体験できる環境学習を
～大津こども環境探偵団～　9

フォトエッセー　フォトふぉと　夏の琵琶湖　木下 博司　11

くらしの特集　誰でもわかるヴォーリズ建築
「NPO法人ヴォーリズ建築保存再生運動一粒の会」会長・建築家 石井和浩インタビュー　12

県外環境取り組み事例　市民参加型公共事業を目指して
NPO「特定非営利活動法人アサザ基金」代表理事 飯島博インタビュー　15

財団活動紹介　小学校ヨシ学習会事業、その他　19

環境滋賀わたしの意見論調　「熱い想いを持って活動を継続していけば、人の意識を動かす事ができる」
学生環境団体「水人」　21

●滋賀県地球温暖化防止活動推進センターだより　●地球温暖化基礎知識　22

巻頭言
kan・tou・gen

「今、あらためて水害経験を次の世代に伝えたい」

京都精華大学教授・琵琶湖博物館研究顧問 嘉田由紀子

この夏には新潟・福島県と福井県、さらには四国などが、相次いで集中豪雨に遭遇し、合わせて20名以上が亡くなった。ふりかえってみると、琵琶湖周辺も水害常襲地だった。琵琶湖流域の水害には3つのタイプがある。

ひとつは山地崩壊をともなった上流型水害である。家屋の壊滅や死者が出やすく、生活破壊度の高い怖い水害である。昭和28年8月の集中豪雨時、信楽町多羅尾で44名の住民が命を落としたものはこのタイプだった。

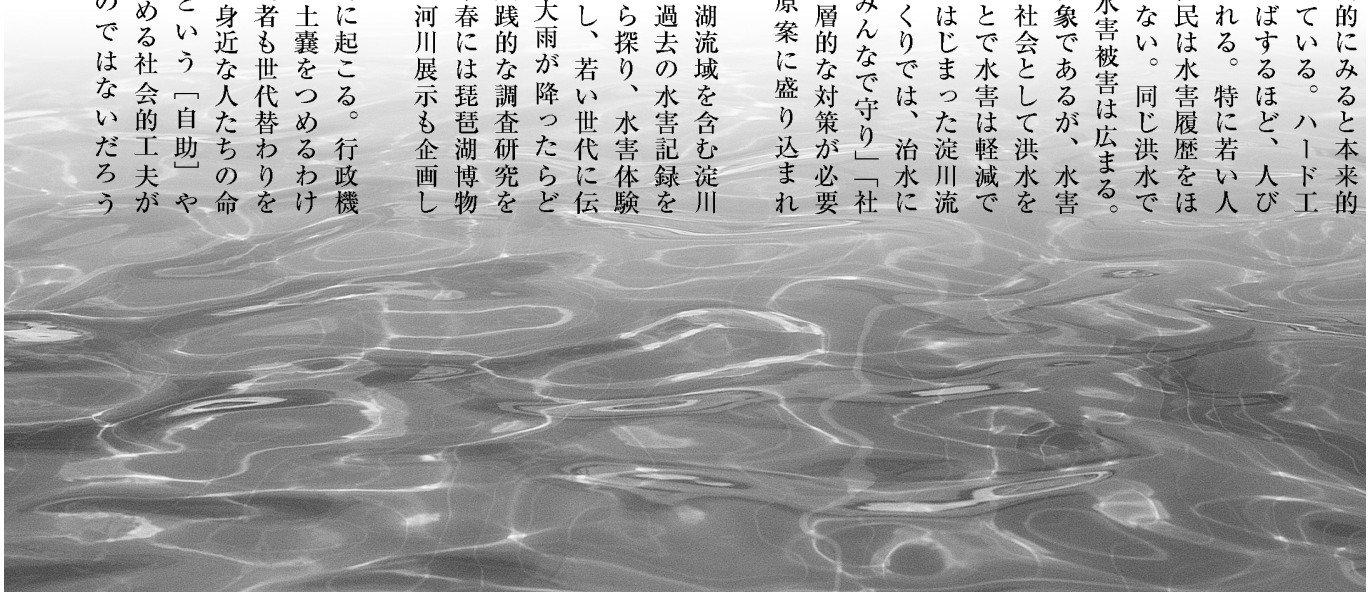
ふたつめは、中流部の平野部の堤防決壊で、人命被害や家屋浸水、水田冠水などの被害がでる。昭和28年9月の台風13号の大雨により安曇川中流部の堤防が決壊し、13名が亡くなった。野洲川、日野川などの大河川もしばしばこの中流型水害を被った。

3つめは琵琶湖固有のもので湖岸の水害で、「水込み（みずごみ）」といわれ、周辺の水田などが冠水し、水が長期間に留まることから、稲作被害などが高まる。過去最大の水込みは明治29年9月中旬のもので、琵琶湖は最高3メートル76センチまであがり、２００日以上水がひかなかった。

このような常襲的水害に対して、それぞれの地元社会では、堤防補強や水防組織の強化、避難体制づくりなどの対策をとってきた。行政も砂防工事、河川改修、湖岸堤防づくりをしてきた。その結果、確かに過去30年ほど、琵琶湖流域での水害被害は減少した。しかし、治水対策は社会的にみると本来的な内部矛盾をかかえている。ハード工事の効果を強調すればするほど、人びとの安心感は高められる。特に若い人びとやいわゆる新住民は水害履歴をほとんど知らされていない。同じ洪水でも、備えがなければ水害被害は広まる。豪雨や洪水は自然現象であるが、水害は社会現象である。社会として洪水をうまく受け止めることで水害は軽減できる。平成13年度にはじまった淀川流域の河川整備計画づくりでは、治水には「自分で守り」「みんなで守り」「社会で守る」という重層的な対策が必要であることが計画原案に盛り込まれた。

私たちは今、琵琶湖流域を含む淀川流域全域を対象に、過去の水害記録を古写真や役所資料から探り、水害体験者の緻密な聞取りをし、若い世代に伝えながら、「もしも大雨が降ったらどうするか」という実践的な調査研究を始めた。２００５年春には琵琶湖博物館で、水害を含めた河川展示も企画している。

洪水は同時多発的に起こる。行政機関がすべての堤防の土嚢をつめるわけではない。行政担当者も世代替わりをしている。我が身や身近な人たちの命を自分たちで守るという［自助］や［共助］の意識を高める社会的工夫が今求められているのではないだろうか。



はじまりは「抱きしめてBIWAKO」

～「抱きしめてBIWAKO」発起人たちの座談会～

中澤弘幸
小梶　猛
青山香菜

1987年11月8日、日本最大の湖・琵琶湖を20数万人の人々が抱きしめた…。

琵琶湖の周囲250キロを人の手をつなごうというイベントで、そこで集めた千円の参加費から大津市にある重度心身障害者施設「びわこ学園」の新築・移転費用の一部として寄付されました。市民主導で企画された、おそらく滋賀県で初めての市民参加型の福祉イベント、そして環境イベントとして、その始まりを探りたいと思いました。そこで、発案者であり実行委員会会長であった中澤弘幸氏をお招きし、当時の実行委員会メンバーから小梶猛氏と青山香菜氏にも同席いただきお話を聞かせていただきました。

求心力かグループ力か

編集部　なぜ「抱きしめてBIWAKO」が成功したか、多くの人が集まったのかというポイントとして、一つは市民から盛り上がったイベントであったからだと思います。今滋賀県では全然ないんですね。行政からの、上からの指示でできあがっているものは広がりがないし、一つは求心的に引っ張ってくれる人がいた、これは中澤さんのことだと思うんですけれども、今そういう人がいない。

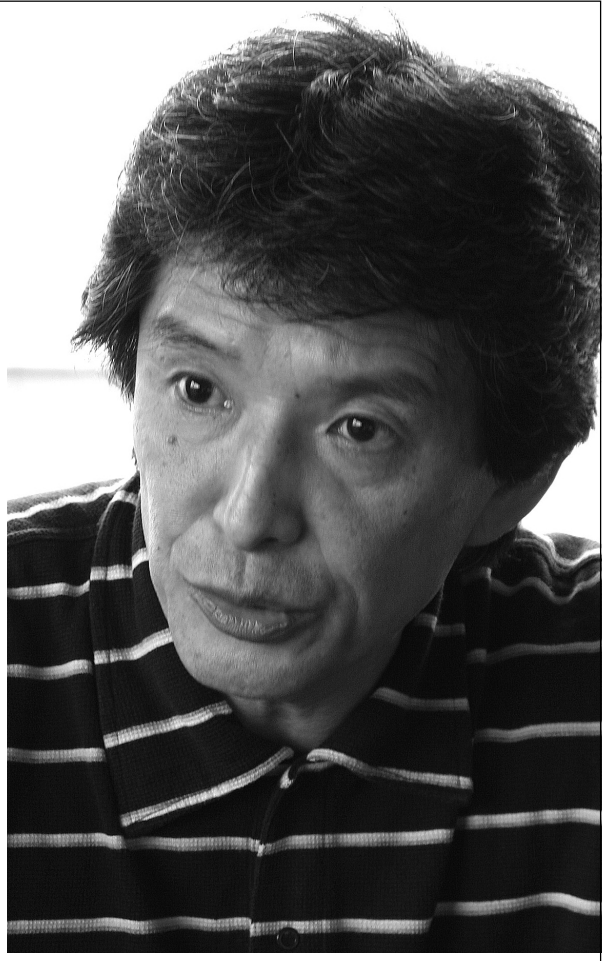
中澤　僕は「餅の絵」を描く人間だから、アイデアと夢を広げるだけ広げて語る。後は、やりたい！という人が出てきて、夢をカタチとして実現してくれたらいいと考えています。関わり方はそれぞれに違っていい、

何事もまず「私から」はじまる。どこまで自分のこととして考えられるかでしょう。行政主導、民間主導とかがモンダイではないと思います。

編集部　そこらへんのお話を聞けたらなあと思っているのですが。青山さんは「抱きしめてBIWAKO」というネーミングの発案者ということですね。

青山　そうですね。「抱きしめてBIWAKO」は11月8日がゴールではなくて、その日がはじまりで様々な市民活動がスタートしました。今はイベントの捉え方が違うかもしれません。イベントが目的になってしまうとつまらない。このイベントは、中澤さんのアイデアはすばらしかったけれど、それだけでは人は集まらなかった。実際に参加してもらう具体的な方法は、スーパーバイザーとして事務局体制の立て直しに入ってくださった湖南生協の細谷卓爾さんの作戦と実行力、生協の理事さんや労福協をはじめボランティア・メンバーの方たちの力が大きかったですね。きっかけは、第一びわこ学園の新築移転費用を集めるためで、琵琶湖の周囲250キロを、一人1メートル当たり1000円の参加費を払って手をつなぐイベントに参加してもらおう。25万人で、2億5000万円が集められる…そんな単純計算でした。それを実行可能にしていくために、細谷さんの提案で、琵琶湖一周250キロを1キロつまり1000メートル毎にわけて考え、1000人をまとめるリーダーをお願いして、250のグループを目標に再スタートしました。

「抱きしめてBIWAKO」は、みんなで手を繋ぐイベントは正午から1分間……その後はどうぞご自由に。グループで参加してくださる人たちはこの日にあわせてイベントを企画してくださいという、自立・分散型でした。1000メートル毎にそれぞれイベントをやってくださいと参加をお願いしました。例えば、湖南生協は生協祭りを、小梶さんのところは八日市で大凧揚げ大会などをやってくれた。小梶さんはもともと何でも楽しんで自分のこととしてやってくれる人だから、ここをお願いしますと言ったら、ハイ、後は任せてと自主的にやってくださった稀有な例かもしれません。そういう意味で、関わり方、ボランティアという捉え方一つにしても価値観が違うということが、このイベントに参加して解りました。当たり前のことですけれど。私がいま参加している環境生協・菜の花プロジェクトも、「抱きしめてBIWAKO」はあくまでも出発点で、そこから永遠に続いていくものです。イベントそのものはあんまり意味がないというとおかしいですけれど、単なるきっかけで、そこから何をはじめるか？環境というテーマも環境問題ではなく暮らし方、生き方と考えているので、自分の生活の中でどう折り合いをつけていくか



中澤 弘幸氏●プロフィール
煎茶道・黄檗売茶流家元。滋賀県中央児童相談所に勤務後、煎茶道を通して国内外の国際貢献・文化交流に尽力。民族、世代、様々な「違い」を乗り越えて「分かちあう」ことを理念に2000年～「日本おにぎり隊」をアフリカ・アジアの国々へ派遣中。社会福祉法人湘南学園の園長時代に「抱きしめてBIWAKO」を提唱、実行委員長を務める。1988年、滋賀県ブルーレイク賞受賞。

C O L U M N

いのちの重さはみな同じ

私は当時、湘南学園という児童養護施設で多くの子どもを預かっていました。何らかの事情で親と一緒に暮らせない、乳幼児から高校生までの子どもたちです。本来は信頼関係があるはずの親に裏切られた子どもたちは大人を信用していません。そんな子どもたちの心を開かせてくれたのが、自分で呼吸することもままならない、生命として存在するだけがやっとの重度な障害をもった「びわこ学園」の子どもたちでした。人はそれぞれ違いがあって当たり前、その違いを認め合うこと。そして、強いものが弱いものを決して侵してはならない。「いのちの重さはみな同じ」、いろんな人がいて社会ということを、子どもも大人も一緒に学びました。ところがこの「びわこ学園」は老朽化が進み、新築・移転が計画されたが、その費用は膨大で行き詰まる……福祉の世界が抱えている問題の根っこはみな同じ。何とかしなくてはと、生命の尊さを見据えたまちづくりを考え、話し合う「ありがとういのち・市民サロン」がスタートしました。そこで、びわこ学園の新築移転費用の一部を捻出するための市民カンパの方法として、「琵琶湖の周りで手をつなぐ」アイデアが生まれました。

青山 香菜氏●プロフィール
エディター。編集工房・北風寫眞舘。「抱きしめてBIWAKO」「AKINDOフォーラム」ほか民間・行政イベントの実行委員として企画・広報を担当。生き方と仕事をすりあわせつつ、環境生協、菜の花プロジェクト、スミス会議など地域のＮＰＯ活動に参加中。

ですね。イベントがはじまりで日常へ繋がっていく…。

小梶　もし今、イベントが必要だとしたら、多分、青年会議所などもそれなりにやっているけれども、世代交代がうまいこといかないときに「抱きしめてＢＩＷＡＫＯ」みたいなことがまた必要になるのかなあと。必要というか、自然に発生してくるのではないかな。

何をもって成功とするか

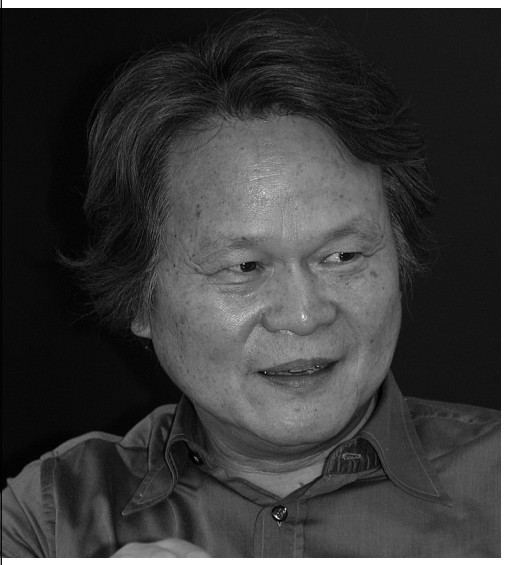
青山　このイベントも成功したといわれているけれど、たまたまその日がお天気でみんなが出てきてくれたというだけで成功だったかもしれないし、25万人から参加費を１０００円ずついただいて収支決算がちゃんとできましたと報告できることが成功になるのかもしれない。多分、中澤さんのタイプだと、当日どんなカタチになったとしても結果的には成功だったでしょう。

中澤　何をもって成功というか、失敗というか。基準がないでしょう。例えば１０００人やったら失敗ですか？25万人が10万人だったら半分以下で失敗なのか。だけど10万人が出てきてくれたら、失敗でしたとはその人たちに言えないでしょう。

小梶　今、人が集まったことで、本質的なことが見えなくなっているけれども、むしろ人が集まらなかった方が見えたことがいっぱいあるかも知れません。逆に、集まったことで分からなくなったことがあるのとちがうかな。

成功は武士道の基準で

中澤　僕は今回のオリンピックで柔道のメダルを見てあることを思った。井上康生は途中で負けたでしょう。だけど、みんな言っているのは、井上康生がいなかったらチームとしてあれだけのメダルは取れていない。だから僕が思うのは、努力をしたら必ず報われるとかね、そんなことはウソ。努力をしなかったら成功しないというのもウソ。成功したり失敗したりというのは見る側の基準であって、例えば10個メダルを取ったら成功だと言っているのは、そういう基準で見ている人の話で、僕は柔道の世界はあまり知らないけれど、井上康生という人の生き方はあれだけのものを創り上げた。それは、勝ってガッツポーズすることをみんな思わずやってしまうが、彼だけはガッツポーズしない。礼で始まり、礼で終わる、礼が終わって初めて喜びというのを表現しなさいと。ところが、井上康生はそんなことにこだわっているから勝てないのだという人が多分出てくるでしょう。だけど、そうではない。やはり道といわれる世界を守っているものの持っている哲学というのは、ちょっとやそっとで崩れるような世界ではない。これからは、この世界の持つ相対論、相手に対する敬意、自分。二つあって初めて一つのものだという考え方が世界を引っ張っていくでしょう。白か黒かで事を決する基準というのはもう行き詰まってしまった。それでは解決しない。環境問題に関しても福祉の問題に関しても、政治に関しても、全てこの基準、日本の哲学が世界を救うようになるだろうと僕は考えています。教育に関していうと、西郷隆盛の薩摩隼人がいい例ですね。鹿児島県は今でもいじめが一番少ない。なぜかと言うと、昔から薩摩隼人というのは外で男がケンカして帰ってきたら、玄関先で親父から半殺しの目に



小梶　猛氏●プロフィール
学校法人司学館理事長。NPO法人しみんふくしの家・八日市理事長、すまいる会、国際交流協会、大凧まつり実行委員会ほか市民グループ代表として、八日市で地域に根ざす様々な活動を展開している。「抱きしめてBIWAKO」では八日市からの参加者1000人をまとめたリーダー。

あわされる。ケンカに勝つということは弱い者いじめだからです。血みどろになっても負けて帰ってきたら、親父は子どもを抱きしめてやる。よくぞおまえはそこまで頑張ったといってね。だから、強い者が弱い者、上級生が下級生を殴るなんて考えられない。鹿児島では。もし腹が立つ下級生がいるとしたらすぐ相撲をとる。相撲で投げるからケンカではない。こんなすごい哲学と教育の方法論があるのだから、それを学んで考えて、僕はこれを日本全体の基準にしたらいいと思う。いじめの問題が、どうしてこんなに解決していかないのか。未だに文部科学省が基準を示せないでしょう。

編集部　話は変わりますが、小梶さんの八日市では、もし人が集まらなければ八日市の受け持ち地区だけ手を繋ぐ列がとぎれてもかまわないとされたようですが、その真意は？

小梶　それは不公平が出るということだけじゃないんです。１０００人の会議に１０人しか集まらなくて、逃げたくなるような思いを何度もした。そこで僕は、現実を見る勇気を持たなかったら何にも進まないと思った。そこから何かを始めんとあかんと。みんな今、現実から逃避するために人を集めているけれど、あまり意味がない。現実と向き合う勇気を持たないと、僕は何も、形あるものはできないと思ったから、ずっとそれを実践しているだけです。

最後の夜、八日市

中澤　今は全国どこへいっても「勝手連」という言い方をしますね。あれは、俺の記憶の中では彼（小梶氏）が言い出したことだった。ほんまに悩んで、悩んでやってきた結果、現実はそれしかないかもしれんという、本当に厳しいところでの結果を「勝手連」と言っている。彼は何もみんなでやろうとしていることに反対しているわけではなく。誰よりも成功したいと思っていた。そうでなければ琵琶湖に面していない八日市市から出てこないでしょう。もちろん、彼は大事な友だちの一人だということもあるけど、彼にとっても僕が言っていることはものすごく大事なんだと。はっきり覚えているのは、イベント直前の夜は八日市へ走ったんです。八日市に来てくれ。大凧を上げるからここでしゃべれ。最後のお願いをやれといって会場を用意してくれた。最後の最後に、夜の8時までですよ。それを今でも覚えている。どんなおばあさんが来てくれたとか…小梶君は僕がイベントの説明を淡々とやっている傍に立って、でも、僕の話なんか何も聞いていなかった。人が来るか、まだ来るか、ずっと出入り口の方を見つめる姿が浮かんできます。

青山　小梶さんのところは、翌年から記念イベントをしてくれましたね。

小梶　1周年は市民グランドで２５０キロをみんなでリレーして、その後は芋煮会やって…それから。市民福祉の国際フォーラムにかかわっていきました。

編集部　ありがとうございます。このイベントのトップを含めスタッフの方々の高邁な精神性に支えられたものであったことがわかりました。また17年前の企画でありながら、今後の環境イベントの運営のあり方に大きな示唆をしていただいたと思います。次号12号（２００５年2月発行予定）では続いて別角度から「抱きしめてＢＩＷＡＫＯ」の秘密に迫ってみたいと思います。

私の印象に残った仕事

My favorite Works

滋賀発!! 「グリーン購入」

「グリーン購入」とは、「環境にやさしいスタイルで、商品を購入したりサービスを受けること」です。花や木を買うことではありません。環境にこだわった商品を買うこともちろんですが、必要数しか買わないなど必要性を考えたり、商品のライフサイクルの中で環境負荷の低さなどを考慮したり、結果的に環境にやさしくなることが大切です。また環境にやさしい商品開発が「エコプロダクツ」として注目されるなどその底辺は広がりつつあります。

滋賀県では、1994年に滋賀県庁出納局において全国に先駆けてグリーン購入の取組が始められました。さらにグリーン購入を促進するための初の地域ネットワークとして滋賀グリーン購入ネットワーク(滋賀GPN)が、1999年12月に設立されました。企業、行政機関、消費者団体などの会員(2004年8月現在398団体)で構成されており、会員がそれぞれ自主的にグリーン購入を実践するだけでなく、キャンペーンの実施やセミナー等の開催など、会員の内外にグリーン購入を広げていくための活動を行っています。滋賀GPNが設立5周年を迎えるにあたり、10年前、県庁出納局在籍中にこの活動の産みの親となられた北川憲司さんにお話を伺いました。

県庁出納課にあるグリーン購入商品。

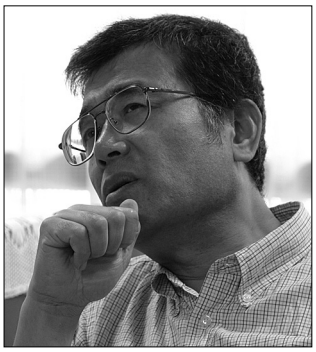
そもそもは、ゴミ問題

◆まず当初のいきさつを教えて下さい。

北川　**僕が四月に出納局用度の専門員に来てだいたい一週間ですわ。つまり、用度というのは県庁の鉛筆から自動車まで購入する権限があるところなんですが、この職務権限を使って、何ができるかなあということを考えたんですよ。以前からね、私は環境問題とかに関わったりしているじゃないですか。それで、環境問題といえば、廃棄物の問題、つまり川下の問題がずっとクローズアップされているが、いくらやっても解決しない。当時よく夢の中で、焼却場のホッパーの上からガー、バラバラと落とすでしょ。あの真下にいて上からブォーンとかぶってくる夢を見ました。だから、環境問題、特に廃棄物に取り組んでいる人間の精神構造ってそういう状態にあると。イメージとして。上からゴミがどんどん降りてくると。それを必死になって処理するための苦労をしていると。そのうちみんな消耗戦でバタバタ二百三高地で倒れていく。その構図があったんですよ。**

◆確かに、ゴミの問題は大変です。市町村のゴミ処理場の限界が近づきつつあるのに、現在一般の方の意識はあまり高いとはいえません。

北川　**ところが川上を、つまりそういうものを購入するサイドといったら、自分らの責任ではなしに行政の責任、企業の責任と**



北川　憲司（きたがわけんじ）
1994年、県庁出納局在籍中にグリーン購入に取り組む。現在は社会福祉協議会事務局次長

いう形でやっている、そういう世界がまだまだあった。だからこれを何とかしないといけないと。つまり川上を変えないといけないなあという、そういう鮮明な問題意識があったわけです。川上を変えようとしたときにどうしたらいいかというときにね、つまり大口のユーザーを動かせばものは変わる。企業が変わればということもあるよ。けどね、企業は市場競争の中でやっているんだから、一銭を争っているんだからさ、その企業に環境を配慮しろと言ったって、それは無理だと。それよりは、少なくとも大義名分が立つ行政が率先する方が市場の仕組みは動かせると。そのときに、コピー用紙一つとっても、一番の大口はどこかと小売店に聞いたら、滋賀県庁ですよ。そうなんや～。うちは最大のユーザーやったら、いただきや！と思ったんです。だったら、うちが変わってやろうと。

滋賀が変われば社会が変わる？

◆ただ、イヤな言い方かもしれませんが、全国の１００分の１と言われる滋賀県が行ったとて、全国や今おっしゃったような市場原理の中心にいる「日本の巨大メーカー」を動かすことは不可能じゃないですか。

北川　僕は思ったのは、もちろん国が一番のユーザーやから国が動いたらいいんだけれども、環境問題は自治体からや、まず滋賀県の中で言ったら滋賀県庁が最大のユーザーやんか。滋賀県庁が変わることで、滋賀県庁に出入りしている事業者さんというのは否応なしにシフトするわな。ということは滋賀県内では市町村含めて影響力があって流れが変わるなあと。それと、流れが変われば、例えば県庁に出入りしている文房具屋さんは、自分の店にその余力の環境配慮のやつを置けるわな。そうすると、小口のユーザーについてもアクセスポイントが出てきますわなあと、こういうことです。滋賀県内では。

　大口のメーカー関係に対してはどうか、マインドの高いメーカー関係は環境を意識しないとやっていけないという感じは当時からありました。ＩＳＯ１４０００の話をするとね、ピーンと企業さんは分かるんですよ。ある企業の販売店向けの販促資料だったかな、何かにね、当時滋賀県のグリーン購入始めたことを、書いてあったんです。企業の死活問題、それに乗り遅れてはという話があったんですよ。企業はそういう、環境配慮をやらなければもう企業は生きていけないという。あ、これは時代は完全に変わるなあと。

◆背景などはよくわかりました。しかし、行政の環境サイドが、企画を社会に提案すると、「そんな、きれいごと誰がやるか」とか「そんなんでは、うちの会社、飯くわれへんよ。」といわれ、役所の遊びのようにいわれて、普及しなかったものが多かったように思うのです。特に「グリーン購入」の滋賀県での普及対象のほとんどは「生きるか死ぬかで戦う中小零細企業さん」が相手です。普及の秘策はなんだったのですか。

北川　典型例をいうとね、「トラヤ」さんが言われたことを今でも忘れないんです。トラヤさんは学生服とか作業服とかを納入しているんですが。トラヤさんが納品していた米原高校の学生服はトラヤさんが強くて、ずっと取ってたんです。ところがトラヤさんが「ペットボトル（の再生素材）の学生服」を何としても米原高校に入れたいと、校長や教頭に営業をかけたわけです。その中で悩んだトラヤさんが来られたんですよ。

生業こそ本物

◆学校にとってはとんでもないことを言い出すもんだと思ったでしょうね。その後一緒に努力されてどうなったのですか。

北川　そうしたら意欲的に職員会議にかけてくれて、オッケーが出た。結局それが滋賀県第一号で入ったわけ。そのあとトラヤさんが僕のところに来られて、リスクがあったけど、しがない小売業者、卸業者が、私も家に帰ったらゴミの問題とかね、生活だし、そういうことは必要だと思ったけれども、私にとっては遠い話だと思っていた。だけど自分らの商売の本業そのままが、地域貢献、環境貢献であるということを教えられたんだと。つまり生業こそ本物だと。本業の生業でこそ環境で勝負できるんだと。

僕もう涙出たわ。同じような話はトラヤさん以外の業者さんにもいっぱいありました。これが滋賀から全国に広げていった大きな力だったと思います。

◆なるほど、でも会社の環境部署以外の一般社員などは難しいんじゃないですか。大手の社員の中にも、「会社のためにはきれいごとは言ってられないという」風があるように聞いてます。それについては。

北川　**まさにそこなんですよ。岡山市で講演のあと女の人が飛んできて、「北川さんの話、目から鱗でした。庶務にいる私でも環境の仕事ができるということがものすごくうれしかった。明日からやります。」だから、トラヤさんと同じなんですよ。みんなそうなんですよ。生業にこそ環境の最前線を担える。これが、みんなが企業も含めて動き出した最大のやつですね。飯のタネは別にあって、その余力で何かをするのではない、本業勝負だと。本業勝負という形にできるようになったのはなぜかというと、やっぱり市場の仕組みを回すという前提でできたからや。環境を配慮した商品が出れば、コストも安くなるし、卸屋さんにしても小売り屋さんにしても扱えますよね。だから飯が食える前提でやらなかったらウソ。飯が食えるから本業。本業だからこそ、そこで環境ができる。これが本物になる。そこの原点が必要なんだと思います。**

グリーン購入だけではダメ

◆うーん。「本業勝負」そういう言われ方だと納得できるような気がするし、グリーン購入だけでなく、環境や他のすべてに言える気もします。

北川　**もう一つ思うのはね、グリーン購入だけ考えてたらグリーン購入はできない。循環システムの問題というのは、メーカーでも卸でも、小売りでも行政でも、自分が今やっている仕事でどうするかというよりも、家に帰って地域の生活者としてどうありたいかというのが原点。しかも仕事ではできないと思っていたら、たとえば私が学生服の販売で環境配慮することによって、自分の息子に、環境配慮した仕事をしていると父親として堂々と言える。生活者としてどう安心できる仕組みを作りたいかというところにいつも立ち返る。原点はそこやと。同時に生業こそ本物勝負やでと。そういうふうに思っていますね。**

◆ありがとうございます。先日、滋賀GPNで活動されている滋賀県の企業さんが、滋賀県での需要がなかったので他県まで行き、評価されて商談成立したという話を聞きました。そこに、かつて苦労して全国に販路を求め成功した「近江商人」の魂を見たような気がしました。「環境を重視する」ことを活路としてかつての近江商人が復活しそうな気もするのです。滋賀グリーン購入ネットワークが、そういった熱心な企業さんの切磋琢磨する場となり、その結果多くの優れた企業を輩出することとなれば、今後の滋賀の社会にとってたいへん明るい話題となると思います。

市町村エコの輪

Circle of ECOLOGY

子どもたちが楽しみながら体験できる環境学習を

～大津こども環境探偵団～

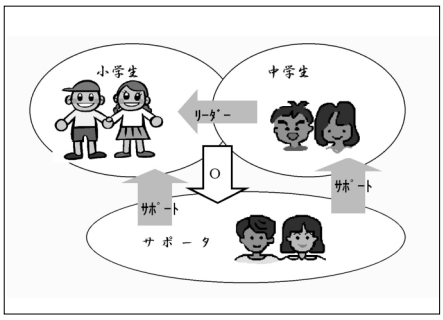
自分たちが住んでいる大津市の豊かな自然、まちなかの環境など身近な環境に親しみ、かつ楽しみながら考えて活動してもらおうと「大津こども環境探偵団」ができました。今年で15年目となる活動の内容を紹介します。

小学生だけでなく大人も参加できる仕組みづくりを

大津市は南北に長く、比叡山や田上山などの山々と琵琶湖に囲まれた自然あふれる地域です。

「大津こども環境探偵団」は、特に次代を担う子どもたちを対象に進めている環境学習プログラムで、平成2年度にスタートし今年で15年目を迎えます。身近な環境に関するさまざまなプログラムを体験してもらいながら、「私たちにとっての住みよい環境って何だろう？」ということを考えてもらいます。

団員は大津市内に住んでいる小学校4年生から中学校3年生までの53名。小学生の活動終了後にはリーダーとしての役割を担う中学生活動を、中学生活動終了後には、より進んで活動の運営をするサポーターへと子どもの成長に合わせた活動を行っています。また今年度は、サポーターの方たちの研修会などを行い技術の向上を目標にし、探偵団活動をよりよいものにしようと取り組んでいます。講師として「川の水質探偵」はおおつ環境フォーラム「子どもが遊べる川づくりプロジェクト」の皆さんに、「里山探偵」ではびわ湖バレイ自然塾の皆さんにと地元の大人の方に指導してもらいます。人生の大先輩である方々にいろんなことを教えていただき、「未来の環境人」を目指していこうと思っています。



今年の活動は川と里山

今年は2グループに分かれて市内の河川の調査や、志賀町にある里山内での活動などをふくむ5回の活動を行います。

私たちにとってかけがいのない琵琶湖の水質や生き物を大切にするためには、琵琶湖に入る川をはじめとして川の源である里山を正しく保全しなければなりません。今年度の活動ではこれらの川や里山の活動を中心に夏休みに行う宿泊環境探偵などの活動を行います。

1年間の活動プログラム

☆全体の活動

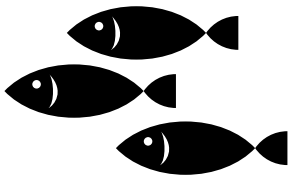
5/15(土)午前	結団式・ゲームなど
7/27(火)・28(水)	宿泊環境探偵
12/4(土)	壁新聞作り・修了式

☆Aグループの活動

6/26(土)	里山探偵
9/11(土)午前	川の水質探偵

☆Bグループの活動

6/26(土)午前	川の水質探偵
10/23(土)	里山探偵



①	
②	
③	④
⑤	
⑥	

①自然マップづくり
②ほ～ほ～ホタル探偵
③びわ湖の外来魚探偵とエコクッキング
④⑤川の生き物探偵
⑥森の生き物探偵

夏休み中、市内で最も自然の豊かな葛川で行う1泊2日の探偵です。葛川の自然体験と仲間づくりというテーマの中で活動を行っていますが、ここで去年の活動について紹介します。

「森の生き物探偵」ではまず地面がどれぐらい雨水を吸い込むか実験しました。比較としてアスファルトにバケツ1杯の水を撒くとあふれたのに対して森ではなんと15杯以上の水を吸い込みました。森には大雨が降っても洪水をふせいでくれる「ダムの役割」があることが分かりました。今度は土をふるいにかけて虫を探してみるとミミズ・ワラジムシ・ダンゴムシなどが見つかりました。これらの生き物たちは枯れた植物や死んだ生き物を食べてフンをだします。これが肥料となって豊かな土になり森の植物の栄養をつくっているのです。

次は川にフィールドを移して「川の探偵」を開始。川登りでは森の川の水が思ったより冷たいことと、川の流れが見ているよりも力強いことにみんなびっくりしました。きれいな水のところにはきれいな水が好きな生物がいるというように川にいる生き物の種類はその水質によって違います。こぶしぐらいの石の裏にいる生き物（ヒラタカゲロウ）、石や砂の下をかきまぜて下流に置いた網に流れて入る生物（サワガニやヘビトンボ、カワゲラの仲間など）などを探しました。川の流れのゆるやかなところを探すとたくさんの生き物を見つけることができました。団員たちは大きい生物を見つけたら大騒ぎ。一番人気はやはりサワガニです。川には魚のほかにもいろいろな生き物がいるということをはじめて知った団員も多かったようです。生き物の種類を調べてみるときれいな水にすむ生物がたくさんいたので、葛川の川はきれいな水だとわかりました。

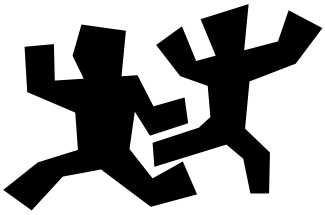
名実ともに一大イベント「宿泊環境探偵」の実態を紹介

さて、自分たちの近くの川はどんな生物がいるでしょうか。この体験をきっかけに近くの川にも興味を持ってもらえたらと思います。夜には星空を観察、次の日のお昼にはみんなで協力して飯盒炊さんと目白押しの活動が続きました。団員たちの感想を見ると小学校や学年の違うみんなとの活動や宿泊は団員たちにとって忘れられないものになったようです。

大人になった団員に会うのが楽しみ

15年目を迎えた今、小学生から団員だった子どもたちが高校生、大学生になってサポーターとして活動を運営しています。

今後も身近な環境について考えることや仲間とのつながりがずっと続く活動ができるような環境学習活動をめざしていきたいと思います。そして団員たちが大きくなったときにまちの環境リーダーとして活躍してくれることを楽しみにしています。



「夏の琵琶湖」

写真・文／木下　博司

フォトふぉと
Photo × Photo

今年の夏は、酷暑が続きました。
東京などは、ヒートアイランド現象とかで
40度近い暑さが続いたようです。
大都会特有の暑さです。

滋賀は琵琶湖があるから、いいですね。
こういう時に、きびしい気候をやわらげています。
陸の植物が暑さで、バテていても、湖中のヨシは元気です。
しだれ柳も涼を呼び、力強い入道雲と好対象です。

淡くさざなむ水面の夕焼けの色が、暑かった１日の終わりを告げます。

くらしの特集

誰でもわかる ヴォーリズ建築

「ウィリアム・メレル・ヴォーリズ(1880～1964)」という人の名は、ご存じの人も多いと思います。近江八幡市を中心に活動した企業家や宗教家という顔と、話題になった「豊郷小学校」など日本に多くの建物を残した名建築家でもあります。最近、ヴォーリズの建築物が、環境や健康などの面で多くの著名な建築家の注目を浴びています。「ヴォーリズさんの建物」をわかりやすく語っていただこうと、建築家石井和浩さんを近江八幡市の旧八幡郵便局に訪ねました。

「建築」、「建物」ってなーに？

石井先生。ヴォーリズさんの話の前に、「建築」、「建物」について分かりやすく話していただけますか。

石井　まず、人を育てる場所でありますね。特に子どもがすくすくと成長していくという部分で、もっとも精神的に影響を与える場所だと思います。従って、人を育てる場所でもあって、それから、当たり前のことなんですけれども、衛生的に健康的に安全で安心して暮らしていけるというふうなものが最も基本になっているものだと思いますね。

日本住居は仕事、冠婚葬祭中心

例えば日本の旧来の住居は、家人のための居住空間が少ないような気がするのですが。

石井　そうですね。日本の今までの建築、特に住宅ですね。大正期までですね。商売のスペースだったりとか、農作業のスペースだったりとか、仕事がひとつの中心であったり、近隣とのお付き合いの部分で、冠婚葬祭が中心の住宅だったわけなんですけれども、大正期に入りましてから、ヴォーリズ自身が一般の方向けに、日本住宅の良さというものを、和を大切にしながら洋住宅の住まいというものを和の中に取り込んでいきました。

たとえば、「調理する台所と食べる居間の距離」つまり動線を合理的に考えることによってコンパクトにつくるということですか。

石井　やはり、居間を中心としながらも、特に台所については調理スペース、それから流し台、コンロの位置というのが非常に動線を短くしながら、要するに負担をかけない、毎日の作業ですからできるだけ疲れない、なるべく短い距離で調理がしやすいようなスタイルをそのまま建築の間取りに設計しているところがありますね。それと、衛生的な部分でいうと、窓を大きく取って、直射日光を取り込んで殺菌効果をねらい、さらに、窓を東側に向けて台所に日が射し込むように考えてあります。

日本の住宅を勉強させてもらった

石井　本当に、滋賀県の独特の民家というのは一目置いていましたね。日本の住宅を勉強させてもらった中でオリジナルの部分の新築でもってヴォーリズ建築というものを設計して。ですからベースは日本建築。日本の家屋というのはフルオープンにしていれば自由に使える。逆にいうと合理的なんですよ。ところが家具を置く場所がないだけであって、ちゃんと作ってやれば、あとは廊下を少なくして、フルオープンに使って、間仕切りもできる。応接間にも使えて局長室にも使えるように、両方使えるように考えてあるんです。これは、日本の長押（なげし）ですね。（写真①②）…これが特徴です。外国の建築家はこんなことしないんです。恐らく日本に来て、長押を見て、引っかけられるものがありますよね。あれを見て、それを洋風にした。

省エネと言っていますけれども、昔は当たり前

石井　この旧八幡郵便局は、町家のうなぎの寝床の形態ですので、非常に間口が狭くて奥行きが長い土地なので、そういう場合は非常に薄暗いんですね。家の中が。ですからそこを何とか使いやすいように明るく健康的に執務作業をしてもらいたいというヴォーリズの思いがあって、大正期にすでにガラス屋根、ガラスのトップライトを作っているわけなんです。ガラスなんです。（写真③）その横に、通常のガラスを入れたトップライトだけじゃなく、その横に窓を抜いているんですね。ですから、トップライトを取ると熱気がこもりますから、そのすぐ横の窓を開けることによってその熱気が外へ排出するようになっているんですよ。こういうパターンはめずらしいと思いますね。結果的に電気代が節約できる。今では省エネ省エネと言っていますけれども、昔は当たり前のように、そういったムダなことをしない、できるだけ自然の恵みを利用しよう、受けようという。

二階は電報電話局になっていましたから、ここに電話交換室があって、配線がこちらに出て

石井　和浩氏●プロフィール
近江八幡市で石井建築設計事務所を経営するかたわら、近江八幡の町家やヴォーリス建築の保存にも努める。ＮＰＯ法人ヴォーリズ建築保存再生運動一粒の会会長

きましたので、この床下に配線ピットを、昔の廃材を利用して作っています。（写真④）床はツーバイフォーです。床組はツーバイフォーで非常に細かく床組を入れていますので非常に丈夫なんですね。ですから全体は日本家屋の在来工法といわれる工法なんですけれども、床はツーバイフォーのしっかりした頑丈な床にしています。そして下履きで上がりますから、板の部分は1階の音が緩衝するように、この中に切り屑を下に敷いています（写真⑤）。

材料をムダにしないということもあったんですね。これは日本建築が当時からずっとやっていましたので。この町家の建物でも古材を利用してやっていましたので。使っていた材料をそのままムダにせずに、そのまま使っています。

外観を見たらバラバラ

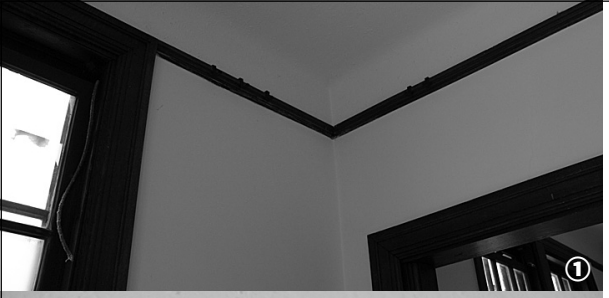
変わった回転窓がありますね。

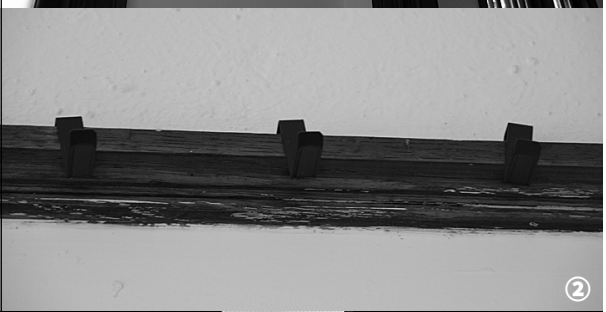
石井　ここは、風がこう、下からこう抜けていくんですよ。ちょうどいい具合の位置に回転窓がついているんですね。それも細かい窓じゃなくて、横に長い回転窓というのは珍しいんですよ。（写真⑥）外から見ると、ヴォーリズ建築の窓というのはバラバラなんですよ。上に上がって見ていただいたらわかるんですが、外観のプロポーションから見たら、あれっていう感じなんですね。

外観よりむしろ中身というのは、結局使う人の身になって設計しているというところが、使う人の身になるということは、蒸し暑い日に雨が降ってきたと。雨が降っていても風が通り抜けるにはどうしたらいいかという発想なんですね。ですから、場所場所、部屋部屋の用途、使い方によって窓の開閉の仕方というのはそれぞれ変えています。この近くの一柳記念館なんか特に、バラバラですよ。いろんな窓がついています。全部意味があるんです。中の使い方によって変えていますね。開閉の仕方。だけどやっぱり使い出したら気付かれるんですね。窓を開けたり、ちょっと風を通したいとき、なるほど、回転させたらここで止まるようになっているんだな。（写真⑥）風の調整ができるようになっているなとか。例えば日本の場合引き締めの窓をぱっと開けてこれで調整するわけなんですけど、タテでこう入ってくる。しかしみな、差し込んでいく。しかし差し込まずに風を入れるには、こういう回転窓にしたら、ちょっと止まれば入ってこない。そして風は入ってくる。

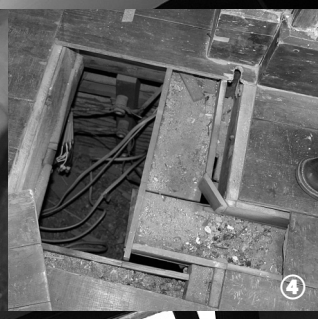
でもこれで大分、分かってもらえると思いますね。空気が流通しますから。血液と一緒なんですね。人間も血液が循環すると健康と言えると思うんですが、建築も人と一緒だと思いますね。

後はなにも申すことはございません。「建築」というものへの考えが根本的に変わりました。ありがとうございました。


①


②

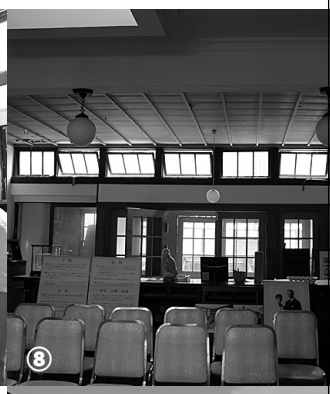
③


④

⑤

⑥

⑦


⑧

⑨

⑩

⑦隣家との間の通気窓
⑧旧八幡郵便局の内部から
⑨２階の通気孔
⑩ベランダからの風景

市民参加型公共事業を目指して

行政の行ってきた公共事業に一般市民が参加するという「市民参加型公共事業」が全国に広まりつつあります。一方、「NPO（特定非営利活動法人）」と呼ばれる法人が全国で設立され、将来こういった公共事業の担い手として注目されています。茨城県霞ヶ浦・北浦流域では、NPO「特定非営利活動法人アサザ基金」がアサザ（注1）などを植えて水辺の自然を復元する「市民による公共事業」を進めています。そこで、茨城県牛久市のアサザ基金事務所にて、地元中学校の講演会より戻られた代表理事の飯島博さんを取材しました。

飯島 博（いいじまひろし）
アサザ基金代表
関東地方で活躍するNPOアサザ基金代表。アサザ基金は、行政と土木業者で行う公共事業から脱皮し、学校・市民にも参加できる公共事業を霞ヶ浦の保全等で実施している。日本の環境NPOの代表格。

新しいヨシ屋根は面白そう

「明日の淡海10号」で紹介した琵琶湖のヨシ利用のためのオランダ式ヨシ屋根に飯島さんは興味をお持ちだと聞いています。当財団では、このヨシ屋根を全国的に普及させて、ヨシの利用促進を図る企画なのですよ。

飯島　たとえばヨシ屋根建築については、一軒づつ増やしていくのではなく、たとえ歴史的景観ではなくても、あるまとまったヨシ屋根ばかりの地域を新しくつくる。たとえば、長浜みたいな、古い建築物も生かしつつ、この通りを通れば、古い茅葺があったり、この通りはまったく違ったモダンな茅葺の建物があったりする一角があれば、客は来ますよ。観光として備かりますね。そこで色々なものが売っていて、新しいデザイナーが原宿のような服を売る店とか、造形作家がものを売るとか、そんなのやったら結構人が来るんじゃないかなと思うんですよ。ヨーロッパのある国では、エルメスとかイブサンローランのブランド店が茅葺だったと聞いています。

飯島　それは面白い、そういう夢ブランドの店を入らせるとか企画を立ててみたらどうですか。滋賀だったら京都からの流れで人が引き込めるから。あるまとまった景観ができるだけでいいですよ。倉敷だってあんなに人が来たって、町の一角だけじゃないですか。ランドスケイプで「パッ」と見たときに「いいな」って場所が一箇所だけあって、お客はそこを行ったり来たりするわけじゃないですか。街をみて楽しんで、店で買い物をしてまた楽しい。そんなのやれますよね。瓦屋根だけだとそのままなんだけど、茅葺だと時間がたてば色が変わる、ここは何年前にやった。ここは新しく葺き替えたから色が違う。時間を感じられる。自然の時間の流れが感じられる。さらにそこで有名ブランドの店が入り、一番新しいものに触れられる。そういうの滋賀県好きそうですけどね。滋賀は京都に近いという強みがありますね。いい場所をまず見つけることではないですか。たとえば土地改良事業でものがつくれないとか、工業団地だけど売れなかったとか、余っているところは日本中にたくさんあるじゃないですか。そこの近くに昔からの水路が残っていたり、自然再生事業を含めた景観づくりをやるとか。そこで消防法の問題もあるので特区をつくって茅葺屋根で統一する。近くの琵琶湖へ引き込む昔あった水路を自然再生事業でやると行政としてはお金が

オランダのヨシ屋根

（注1）「アサザ」
アサザは、平地の湖沼、水路などに育つ多年草。水中を這う茎から水面に向けて長くのびて葉を広げる。そして、初夏から夏の終わりまでにキュウリに似た黄色い花を咲かせる。昔は、北海道から九州までいろいろなところで見ることができたが、埋め立てや水質汚染で急に少なくなってしまった。

引き込めるし。なんとか一帯の雰囲気をつくればいいんですよ。トタンで被せた茅葺の集落に一軒だけ立派な茅葺が建ってても「パッ」としないでしょ。一つは町並みとしての統一感。そこに主張がある。昔ながらの古い町並みがあって伝統的でいい、まさに「近江商人的」でいいじゃないですか。

「環境保全」のための「環境保全」はお金を使うだけ

それでは本論に入ります。まず「環境保全活動の今後」について伺います。

飯島　「環境保全活動や自然保護活動だけで成り立つ社会」というのは存在し得ないですよ。「ヨシが水質保全するからヨシ原を大切にしましょう」それだけでは、ヨシ原を守る政策はできにくい。ヨシ産業を興し、社会の中で生産活動をきちっと行っていけるなかで、それに付帯する形で環境保全を行っていくことが一番望ましいですね。これが本来、政策をつくるものが出していく形であると思うのです。環境保全のための環境保全はお金を使うだけだから。現状は「行政が趣味でやっている」ともとれなくもないですから、一般の人々もそういうものだと思っている。またその活動に先がない、いわゆる倫理観だけでは環境保全というのはどうしても制限や規制にたよりますから、ふつうは夢も希望も展望もないんです。もちろん創造性も。そういうものに惹かれる人は、普通少ないですよ。まれに一生懸命な人がいると引っ張られて一時的に盛り上がるけど一過性ですよね。

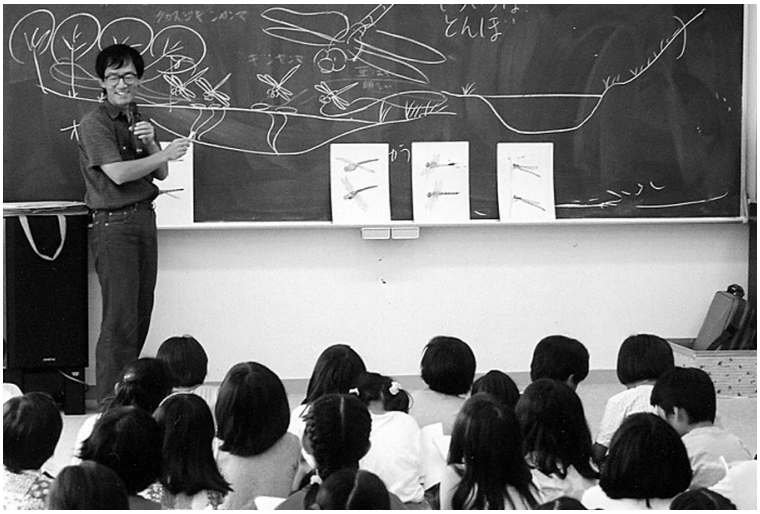
小学校を拠点とした地域コミュニティづくり

アサザ基金の現在の活動と将来ビジョンをお聞かせください。

飯島　今は、学校を一つの拠点にしています。特に小学校ですね。地元の牛久市とは、環境保全だけでなく、まちづくり、都市計画、環境計画、福祉計画などのベースになるような授業としての総合学習をやっています。次の展開というのは街づくりに繋げていく、子供たちの総合学習をやっていくと毎年毎年大変な情報が収集されてかつ総合学習の授業の中でビジョンとして提案されていく、それは子供のことだからとばかにできないですよ。たくさんの情報が抽出されてそれを利用できる。将来の市民になる人たちに、その地域を担っていく人たちの思いが、その中には託されます。いろいろな人の街づくりへの思いが出されます。それをダイレクトに生かしていける仕組みづくりを今やっていく、それが次の展開です。それをやる中で、たとえばNECさん、ITを生かしたネットワーク授業、それが新しい技術展開を生み出す場ともなっています。

すごいと思いますが、こういった活動は、滋賀県でもできますか。

飯島　滋賀県でもできます。たとえば一つの学校であっても、それは学区内であっては一つの地域コミュニティとしてまとまったもので機能するじゃないですか。機能すればそれは他の学区でも普遍化できるわけです。あそこでもできたというわけで、それがまとまってくれば、もっと大きな政策ができる。そういうことに、政策立案者の行政の人が、気がつけば、違うんですよね。またそういうことに気がつきはじめている。国レベルでは、アサザ基金の取り組みは何度も取り上げられていて、今年の国民生活白書にも載りましたし、国はそういう戦略をよく理解していますよね。今後必要だということをね。特に市町村合併が進むなかで、今後地域コミュニティというのがますます重要になってきますね。従来の境界線が引き直される。境界線が一時消滅すると、みえるのは、地域コミュニティの単位つまり学区です。住民の皆さんがそれに気づきかけた時期に、こういう事業を立ち上げたわけで、タイミングがよかったわけです。地域を構成する



地元小学校で授業をする飯島氏

基本単位に戻るわけです。基本単位に意識がいかなければいけない。いや、いくはずです。小学校が地域の拠点として位置付けられていれば、行政の人たちの地域づくりにも役に立ちます。先ほどのヨシ葺きの町並も小学校の総合学習から提案できますよね。たとえば、授業で地図をもとに場所を探す。どこがいいかな。ここだったらどんな町並ができるか。書いてもらう。それを行政の人たちが参考にする。また、子供たちが何年にも渡ってその課題にとりくんでいく。それに関係する人々とつながっていく、そして少しずつ具体化させていく。消防法がどうかなんてことは、子供に調べてもらえばいいじゃないですか。海外ではどうかとかね。

霞ヶ浦でのイサザの植栽

アサザ基金さんは、県境をまたいで広域エリアで活動できるダイナミックさがありますね。それも、小学校という地域コミュニティを単位としているからできることで、あくまでも地域単位なので違和感がないですね。どうしても行政という看板を背負うと、個別の枠組みがあるから越えない越えないという問題が出てくる。わたしたちは、なんの違和感もないんですよ。同じことを地域地域に合わせてやってるわけなんですよ。やはりNPOをうまく使わないといけないですね。

日本のNPOには経営戦略がない

そこで次に、「日本のNPO」についてですが、可能性もある反面、運営の難しさもあるようですが。

飯島　今のほとんどのNPOには、経営戦略がない。ビジネスプランをつくろうとしていない。いいことをやっているから、必ず世の中から支えてくれるはずだ、必要とされるはずだといっているのが、日本のNPOです。それはありえない。ビジネスプランを立てて、それが新しい市場を生み出し、それが価値を生み出す。まさに茅葺がそうじゃないですか。そのプロセスを経なければまさに産業は再興しませんね。そういった戦略を展開できるのが今の時代ではNPOなのです。ただNPOの能力に対する評価をしないといけませんね。いいことしているから応援しようではダメ。いいことしている中身が問題で、さらにそれらを実現させるためにどういった戦略を持っているのか。戦略というのは、単に啓蒙とか普及とかではなくて、政策としての戦略はあるか、ビジネスプランはあるか。そういうことまで含めた経営能力が計られねばならない。まだ世間では、NPOはボランティア団体とか、NGOと同じであると思っている。もしそうであれば、NPOをつくる意味がないですよ。そういった意識意欲が日本のNPOにはまったくない。みんな金がないといっているが、それ以前にないのは、アイディアですよね。アイディアのないところにはお金はこないですよね。

商売もチャリティも夢も必要 NPOは企業経営より大変そう

行政への対応力や技術的なノウハウも大事ですか。

飯島　もちろんです。それは、行政だけでなく企業に対しても同じです。今うちはいくつかの企業さんとお付き合いをしていますが。これは交渉能力が必要です。行政や企業といったビジ

ネスパートナー、行政もビジネスパートナーですよ。こちらが損しないように、相手にこちらの戦略をうまく取り込ませるようにもってくる。これも一種の営業能力と考えた方がいいでしょう。

従来の市民運動の持つ行政への対応能力とか交渉能力とは、また違うんじゃないですか。みずからビジネスプランを公共事業の中に取り入れさせる。多くのシンクタンクや企業がやってることで、新しい技術、新しいシステム、新しい都市計画を行政に提案して仕事を行い対価を得ていく。それをみんながやらねば社会は活性化しませんよ。ただし、ビジネスだけではなくチャリティの部分もありますよ。それはなにかというと夢。夢を実現させるために本当にやっているのか、それが評価です。住民からの評価または企業などからは寄付がくる。もうひとつは、新たな事業を生み出していく、それが本当の意味での主体でしょうね。みんなチャリティのほうばかりに目がいっているのです。ほかのNPOは金がないといっていますが、アイデアがないだけですよ。お金がなくてできない人は、お金があってもできません。NPOの財産はアイデアです。

環境だけじゃダメ。

また仕事としては、環境保全だけでなく、学校教育、社会福祉、都市計画などNPOにはいろいろな対応力が求められるのですね。

飯島　環境保全だけではだめですね。現代社会は専門分化が進みすぎて、硬直化してしまったのですから。専門に特化したものはダメ、事業をする上で対応力がないとダメ、でもかねあいが大切、手広くやりすぎてつぶれる企業もありますよね。時代に応じて伸びたり縮んだりという適応力が大切。老舗だって滅茶苦茶に商売を広げてつぶれたところもあったじゃないですか。きちっとしたところはバランス感覚がありますよね。ただ守りだけでもいけないので、そのへんのセンスじゃないですか。NPOは生活者としてのセンスを失ってはダメです。

鵺(ぬえ)のように…

飯島　特に市民団体の老舗みたいなのはダメですね。NPOは市民団体ではないですよ。まったく新しい形態なんですよ。従来の市民団体やネットワークを引きずっていくとダメです。時代が変わったんだから、新しい入れ物がなくては。新しい事業や産業をおこすのですよ。従来のものもリニューアルしていく。それが今すごく重要な課題なんですけどね。まさに企業もできない、行政もできない、市民団体にもできない。NPOはまったく新しいスタイルなんですよ、企業的であり、市民団体的であり、さらに行政的な要素、それをうまく使いわけていく、まるで「鵺(ぬえ)」（注2）のように動いていくものが必要です。こういう名付け難いものが今の世の中には必要といえます。

最後に滋賀の団体に一言、あまりきびしい言葉はかんべんしてください。

飯島　滋賀県の団体さんは、やはり京都が近いせいか「都人」ですね。箱庭的にそれぞれのエリアや分野を決めて活動をされてる。箱庭文化、琵琶湖は巨大な箱庭だと私は思ってますよ。霞ヶ浦のまわりは真っ平らです。茨城は良くも悪くもおおざっぱですね。板東武者は荒っぽいんですよ。すみません。ここは、平将門（注3）が活躍した土地ですから。滋賀は、何に関しても、ここからは行政、ここはあなたのところ、ここからは私たちというように遠慮し合っているように見えますね。自然のつながりや広がりに合わせた、人と人との連携と協働がこれからの社会には必要だと思います。

ありがとうございました。このお話の内容を多くの滋賀県の人々にPRします。今後「都人？」的である滋賀県では、さらに地域風土にあった環境保全の展開やNPOの活躍を促進し、琵琶湖をはじめとする「庭園のように」美しい湖国滋賀の実現ができればと思います。また、一日もはやく霞ヶ浦・北浦が、昔のようなトキの舞う美しい湖に戻りますように。

（注2）「鵺」
伝説上の怪物。頭は猿、胴は狸、尾は蛇、手足は虎、声はトラツグミに似ているといわれる。それを転じて、正体不明の人物やあいまいなもののたとえに使う。

（注3）「平将門」
平安時代中期の武将。元朝廷に仕えていたが、関東に赴く。その後近国を侵し、自らを新皇と称し、関東に威を張ったが、平貞盛・藤原秀郷に討たれた。

6月

県下7つの小学校でヨシ学習会を行っています。4〜6年生の児童がヨシについて学び、校内でヨシを栽培しています。秋には琵琶湖へ植えにいく予定です。

●教室でヨシ学習会

●みんなでヨシの苗植え

小学校ヨシ学習会事業

7月

ノーリリース ありがとう券事業

ブラックバスやブルーギル(外来魚)を指定店に持ち込めば、ありがとう券(金券)と交換するという事業です。昨年度に引き続き、多くの人々が外来魚を持ち込んでいます。琵琶湖の外来魚駆除に貢献しています。8月末時点で約20トンの外来魚を駆除することができました。

●ありがとう券でお買い物

●大津膳所会場

●外来魚引換所

財団活動紹介

本年度も当財団では、琵琶湖の環境保全を中心に様々な事業を予定しています。
様々な県民の方に参加していただける事業や水草刈り取りという財団独自の事業など、8月までに行われた主な事業をご紹介しましょう。

お～みＥＣＯクラブ 夏休み体験教室

環境セミナー船みずずまし号に乗り、親子で夏の琵琶湖を体験しました。
講師の説明や水質測定など楽しくて有意義な夏の日を過ごしました。

●環境セミナー船みずずまし号

●講師の説明や水質測定する子どもたち

8月

●水草刈取機「スーパーかいつぶりⅡ」

水草 刈り取り事業

琵琶湖の水草の刈り取りは、今が最盛期です。コカナダモ、オオカナダモなどの外来種の藻を主に取ります。

●水草刈取機「げんごろう」

びわこヨシ たいまつまつり事業

冬に刈り取ったヨシなどを使い、琵琶湖の恵みに感謝するという「びわこヨシたいまつまつり」が8月28日に琵琶湖周辺の13箇所で行われました。約3万人の人が参加して、去りゆく夏を惜しみました。

●彦根柳川会場

●草津烏丸会場

環境滋賀 私の意見論評

「熱い想いを持って活動を継続していけば、人の意識を動かす事ができる」

学生環境団体「水人」

最近、環境問題に関したイベントや環境教育と呼ばれるものが増えてきています。私たち水人もヨシ笛を吹いたりヨシ笛の作り方を教えたり、外来魚を使って料理を作ったり、湖岸を清掃したりする事で環境への思いをアピールしています。

例えば、私たちがヨシ笛を吹いているのは、ヨシ笛を通じてヨシや琵琶湖などに目を向けてもらいたいなと考えているからです。そんな願いを持って様々な所でヨシ笛を吹いてきました。しかし、私たちのヨシ笛の音色を聴いて、どのくらいの人たちが実際にヨシや琵琶湖に目を向けてくれたことでしょう。

私たちはヨシ笛を吹く際に、ヨシの機能やなぜヨシ笛を吹いているのかといった説明を簡単にしています。私たちのヨシ笛を聴いてくれた人たちは、私たちの説明やヨシの音色を聴いただけで、「ヨシを大切にしよう」、「琵琶湖の水ってきれいなんかなあ」、「もっと水を大切にしよう」などといった考えを本当に持ってくれているのでしょうか？

私たちのヨシ笛を聴いてくれた人達の意識が変わったのか、一人一人つけていって見るわけにはいきません。私たちの活動が人々にどのような影響を与えているのか、私たちは本当に意味のある活動をしているのか、正直わかりません。私たちが何か活動をしても、それが社会に対して何も影響を与えていなかったら、結局それはただの自己満足に終わってしまうのではないでしょうか。

では、なぜそのような活動になってしまうのでしょう。大きな原因として、水人一人一人の思いがバラバラだという事があげられると思います。水人は京都精華大学、立命館大学、龍谷大学、京都橘女子大学、滋賀県立大学など様々な大学のメンバーから成り立っています。大学が違う分みんなで集まる機会が少ないです。今のままでは、大学の距離に負けてみんながバラバラになってしまっていると感じます。そんなバラバラなまま活動をしていても何も社会に伝わらないのではないでしょうか。

私たちの活動を通して人々の意識を変えるためには、もっと私たち自身が強い絆を持つべきです。そうすることで活動内容、活動方法なども変わってくることでしょう。

そのためにまずは、みんなの心を一つにしていきたいです。みんなの想いが一つになれば、もっと熱い想いが生まれます。そして、その熱い想いをもって、どうしたら環境への人々の意識が変わるのかといった所まで考えた活動をしていきたいと考えています。熱い想いを持って活動を継続していけば、人の意識を動かす事ができるのではないでしょうか。人の意識を変える事はとても困難な事です。そう簡単には行きません。しかし、諦めずに学生のエネルギー全開で進んで行きます！

ヨシ紙漉き

(財)淡海環境保全財団は、さらなる環境保全に対する取り組みを行ってまいりたいと思います。つきましては、当財団に対するご意見やご感想、ご希望などをお寄せください。

家電リサイクル法ってなに？

一般家庭や事業所から排出された家電製品から、有用な部分や材料をリサイクルし、廃棄物を減量するとともに、資源の有効利用を推進するための法律です。
この法律の対象となる**家電４品目**を廃棄する場合は、販売店に引き取りを依頼し、その料金を負担するように求められています。

家電４品目

・ エアコン（ウィンドウ型、セパレート型）
・ テレビ（ブラウン管式）
・ 電気冷蔵庫
・ 電気洗濯機

具体的には何をしたらいいの？

◎新品購入時に古い家電製品と交換する。
（販売店は古い家電製品の引き取り義務があります。）
①購入した販売店に引き取ってもらう。
②購入した販売店がわからない場合はメーカーに持ち込む。
A　自ら運搬して引き渡す
B　市区町村の許可を得た産業廃棄物収集運搬業者に運搬を頼む

引き渡しの際には、販売店、運搬業者にかかる経費「収集・運搬料金」とメーカーにかかる経費「リサイクル料金」の２種類がかかります。

■地球温暖化防止活動推進員委嘱式　報告

2004（平成16）年5月29日（土）、滋賀県地球温暖化防止活動推進員の委嘱式を行いました。
推進員は、地域で地球温暖化の防止に率先して取り組むリーダーで、地球温暖化問題、特に地球温暖化対策に関する普及啓発や地球温暖化防止活動の推進に取り組んでおられたり、地域で環境保全活動を実践されたりしています。

■地域での活動　報告
推進員とセンターとで、地域のイベントに参加しました！
●竜王町環境安全フェア
と　き：2004（平成16）年６月５日（土）
ところ：竜王町総合運動公園
●みずかんフェスタ
と　き：2004（平成16）年７月11日（日）
ところ：滋賀県立水環境科学館

滋賀県地球温暖化防止活動推進センターだより

地球温暖化基礎知識

戦後、高度経済成長を遂げた日本では、大量生産、使い捨てが当たり前の消費スタイルとなっています。そのため、世間ではモノがあふれ、その分廃棄物が増えるという悪循環がくりひろげられています。当然、生産される時や廃棄処理をされる時にはＣＯ２が発生し、現在その排出量は莫大なものです。

このような現状の中で、日本では、使い捨て社会から循環型社会への移行を目指す「循環型社会形成推進基本法」が導入されました。これは、循環型社会形成のための基本的な枠組みを規定したものであり、その下には、分野ごとの法律が制定されています。

そこで今回は、その中の一つである家庭に関係する法律「家電リサイクル法」について説明したいと思います。

明日の淡海

自然と人との共生をめざして

····· Vol.11 ·····

原稿の募集について

機関紙「明日の淡海」では、環境や自然に関心のある方々の意見・提言などを募集しています。

・環境問題に対する考えや環境施設への意見・提言等
・環境に優しい暮らしにつながる意見・提言等
・美しい自然や自然保護に対する意見・提言等

※採用分には薄謝進呈
※当財団まで郵送かメールまたはFAXでお送りください。

編集後記

表紙のきれいな日本画は、日本画家の北村恵美子さんの作品です。北村さんは毎年、伊吹山に登られるとのことですが、伊吹のお花畑が「描いてほしい描いてほしい」と訴えてくるそうです。今後、小誌も様々な環境に携わる人々を「描く」広報物でありたいと思います。

発　行

財団法人　淡海環境保全財団
〒520-0807　大津市松本1丁目2番1号
大津合同庁舎内
TEL：077-524-7168　FAX：077-524-7178
Eメール　ohmi9@mx.biwa.ne.jp
URL http://www.biwa.ne.jp/~ohmi9/

PRINTED WITH SOY INK
R100
Waterless Printing, Naturally.
GPN Green Purchasing Network 印刷サービス
印刷サービスのグリーン購入に取り組んでいます
本誌は、環境や資源の有効活用に配慮した印刷物です。